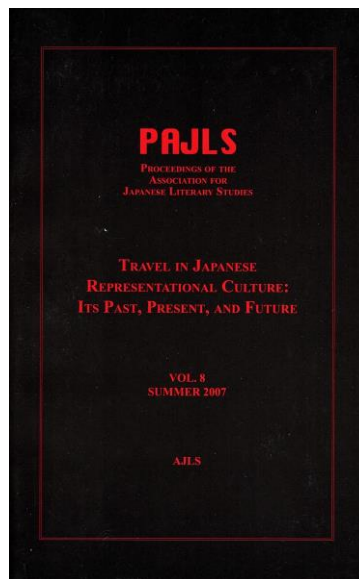


「『東京朝日新聞』の「世界一周」旅行記—明治末期の新聞メディアと異国体験—
“A Travelogue of a ‘Round-the-world’ Trip on
Tokyo Asahi Shimbun: Newspaper Media at the Late
Meiji Period and the Experience Abroad”

河野至恩 Shion Kono 

*Proceedings of the Association for Japanese
Literary Studies* 8 (2007): 212–221.



PAJLS 8:
*Travel in Japanese Representational Culture: Its Past,
Present, and Future.*
Ed. Eiji Sekine.

『東京朝日新聞』の「世界一周」旅行記
——明治末期の新聞メディアと異国体験——
A TRAVELOGUE OF A 'ROUND-THE-WORLD TRIP'
ON TOKYO ASAHI SHIMBUN:
NEWSPAPER MEDIA AT THE LATE MEIJI PERIOD AND
THE EXPERIENCE ABROAD

河野 至恩
Shion Kono
Sophia University

森鷗外「長谷川辰之助」—異国「体験」と新聞メディアをめぐって

二葉亭四迷（長谷川辰之助）が1909（明治42）年に日本帰国の途上に死去した後、内田魯庵と坪内逍遙が文学者や二葉亭の知人に呼びかけて追悼文集『二葉亭四迷』を出版したとき、森鷗外も「長谷川辰之助」という短い一文を寄せた。この文章で鷗外は、二葉亭に最後に会ったときにロシアに行くと聞いて「二十年このかた西洋の様子を見ずにある私なんぞは、羨ましくてもしかたがない」と言ったエピソードを紹介し、また、印度洋上で「澄みわたって、星が一面にかがやいてゐる」空の下、静かに目をつぶって死んでいく二葉亭の姿を想像して描いている。

しかしこの文章を注意して見てみると、鷗外にとっては二葉亭の現況を知るための手段が主に新聞だったことがわかる。

ある日役所から引き掛に、須田町で、電車の窓へ売りに来る報知新聞の夕刊を買って見た。その夕刊の一面に、長谷川辰之助氏の事が二段ばかり書いてある。西洋で肺結核になられて、いよ／＼帰郷せられるといふことであつた。

僕はそれを読んで、外の事は見ずに、新聞を置いて、いろ／＼な事を考へながら帰つた。容態が好くないから帰られるのだとは書いてあつた。併し兔に角、印度洋を渡つての大旅行を敢てせられるのだから、存外悪性ではないのだらうとも思つて見た。¹

また、新聞に寄せられた追悼記事に対して、「誰やら新聞で好い死どころだと云つた。私にもさういふ感じがする」とも書いている。²

¹ 坪内逍遙・内田魯庵編『二葉亭四迷』（易風社、1909年。復刻版は日本近代文学館編、近代文学研究資料叢書(5)、1975年。）下-10ページ。傍線は発表者（以下同じ）。

² 前出『二葉亭四迷』下-11ページ。鷗外が言及している記事は、千葉俊二編『鷗外随筆集』（岩波文庫、2000年）によれば坪内逍遙の「志に殉じたる二葉亭」（『東京朝日新聞』1909年5月17日）か。

では、明治末期の新聞というメディアにおいて、異国の旅、ひいては異国「体験」はどのように語られていたのだろうか。本発表では、1909（明治42）年に『東京朝日新聞』に掲載された「異国」に関する二つの記事——渋川玄耳『世界見物』と二葉亭四迷『露都雑記』——について検討したい。1909年という年は、秋には夏目漱石の「満韓ところどころ」が掲載された年でもあり、文学者と新聞、紀行文とジャーナリズムが出会い、交差したひとつの時点として興味深い。当時の「朝日」における文学者の位置、とくに『東京朝日』の主筆の池辺三山の果たした役割については多くの研究、著作がある。³しかし、二葉亭四迷の『大阪朝日』『東京朝日』における役割については、二葉亭の記事で同紙に掲載されたものが少なかつたこともあり先行研究が少ない。しかし、坪内逍遙が「文学嫌の文学者」と呼んだりした二葉亭「神話」について検証する意味でも、二葉亭と『朝日』の関係を当時の新聞メディアの状況から再検討することは必要なのではないだろうか。当時の新聞というメディアではどのような異国体験が新聞記事になり、どのような体験が記事にならなかつたのか、またなりえなかつたのか。そのような問題意識のもとに、新聞記事が書かれ、編集される場の視点から、朝日新聞記者の渋川玄耳による『世界見物』と朝日新聞ロシア特派員としての二葉亭の仕事である『露都雑記』を比較してみたい。

二葉亭四迷の文体と新聞メディア

まず二葉亭と「朝日」の関係について検討したい。死の前年の1908年、二葉亭四迷は訪日していたダンチェンコの紹介により露都特派員としてペテルブルクに派遣されることとなる。出発前に文学者たちを集めて行われた壮行会の様子が、雑誌『趣味』（1908年7月号）の特集記事に記録されているが、ここで二葉亭は、日本とロシアが戦争を二度と起さないよう、民間レベルの相互理解を促進するために文学の翻訳を活用したいという夢を語っている。

露西亞の雑誌や新聞を段々見たり、露西亞人に交際してゐる間に、自から感ぜられる事は何うしても日露は今一度戦ふ様になるだらうといふ事。（略）然るに又日露は共に好戦国でないと思ふ。前の戦も露西亞人民の戦ではなくて、露西亞政府の戦ひであつた。両国民——否世界の何国も決して戦を好みはせぬ。だから将来の戦を避ける方法は唯一つ。即ち政府が戦はうとしても、人民が戦はぬから仕方が無いと言ふ様にする事である。それには両国民の意志を疎通せねばならぬ。日本国民の心持を露西亞人に知らせねばならぬ。それを何によつてするがいかと言へば、無論文学が一番いゝ。この意味で私は日本文芸

³ 池辺一郎、富永健一『池辺三山 ジャーナリストの誕生』（みすず書房、1989年）、紅野謙介「史論」の言説—池辺三山と夏目漱石『投機としての文学 活字・懸賞・メディア』（新曜社、2003年）所収、など。

の翻訳紹介だけは為たいと思ふ。無論通信員だから其れも為ますが、理想的の仕事としては観察なり右の事なりを為たい。⁴

しかしここで語られているのは、一新聞社の「露都特派員」の本来の仕事ではない。むしろ、それまでの二葉亭の大阪朝日新聞社員としての仕事ぶりをみる限り、二葉亭が新聞社の特派員としてどこまで活躍できるかは全く未知数だったと言わざるを得ない。二葉亭は1904年にロシア関係の外国記事の翻訳者兼記者として大阪朝日に入社するが、二点の小説『其面影』『平凡』以外に、新聞に掲載された記事のうちで好評だったのは桂太郎を風刺した独白形式の匿名記事「ひとりごと」（1905年10月）くらいのものであった。大阪朝日社長の村山龍平は彼を退社させようと動いたが、かろうじて残留できたのは池辺三山のサポートのためだった。

二葉亭がこの時期に書いたロシア関係の記事が、新聞社で求められている文体とはかけ離れていたということは、二葉亭に親しい文人たちも指摘している。例えば内田魯庵は、新聞に求められる文体について、

堂々たる大論文よりは新鮮なるフラグメンタリーの記事、深く考へしめ味しむる含蓄多き説明よりは一見直ちに領き得るデスクリプション、嚙占めて静かに味はって益々甘きものよりは舌の頭で嘗めて直ぐ味の解るものゝ方が読者より遙に喜ばれる。⁵

と、その速報性、読みやすさなどを強調する一方で、二葉亭については、

故人は聡明の人だから之を知らぬではないが、何事にも細さに考へ深く究めて右から左から八方から見一分の隙も無いものでなければ満足出来ないのが故人の一癖、（言換ゆれば長所）だから、折角苦心したる細密なる調査も余り世間の注意を牽かなかつた。⁶

と、文章に関しての緻密さや完璧主義が、新聞というメディアには向いていないとしている。また池辺三山も、二葉亭が大阪朝日社員として権太について書いた記事について、「一部の著述とまでは行くまいが一冊の取調書であつて、どうしても新聞社へ持つて来るよりも参謀本部か外務省へ持つて往けと言ひたくなる様なものであつた。英国あたりの新聞読者ならば喜んで見るかも知らぬが、日本の読者には此んなものは沢山載せては愛想をつかさされさうだ」と書いている。⁷

⁴ 「二葉亭氏送別会」（『趣味』1908年7月号（3巻7号）署名は「一記者」）、17ページ。

⁵ 内田魯庵「二葉亭の一生」（逍遙・魯庵編『二葉亭四迷』所収）下-203ページ。

⁶ 前出「二葉亭の一生」下-204ページ。

⁷ 池邊吉太郎（三山）「二葉亭主人と朝日新聞」（逍遙・魯庵編『二葉亭四迷』所収）上-168ページ。

さらに、二葉亭がロシアのニュースを日本に伝えるのに電報を多用したことについて、村山龍平が自制を求める書簡を書いている。⁸ 1907年に朝日新聞はロンドンタイムズ社と電報の特約関係を結んでいたため、多くの場合ロシアのニュースもロンドンから先に届いていたことが多く、二葉亭の電信の多くは無駄だったのである。村山は手紙の書面では「露都ニ於けると本邦ニ於けるとの着眼点の相違より相生し候自然の結果と被存強ち其打電材料の撰択ニ関し御非難申上候次第には決して無之候ニ付」と二葉亭の心情を傷つけないように配慮しているが、村山がこの手紙に添付した電報料の明細を見ると、電信料は六か月で2800円以上と莫大な経費が掛かっていたことを示している。⁹ この一つのエピソードを見ても、二葉亭がロシアに渡った後も新聞が「作られる」システムを理解していなかったことが見て取れるのではないだろうか。

『東京朝日新聞』と「世界一周会」

一方、1906年、朝日新聞社は、日本初の海外への団体観光旅行といわれる満韓巡遊旅行を企画し、好評を博した。それを受け、1908年1月1日付の『東京朝日新聞』に「世界一周会」に関する大きな募集広告が掲載される。この旅行は旅行会社であるトーマス・クック社の協力によって実現したが、一人の費用は2100円、96日間にわたる旅行に54人が参加した。¹⁰ ワシントンDCではルーズベルト大統領が一行を謁見するなど欧米各地で歓迎された。有山輝雄によれば、この「世界一周会」のイベントは、先の満韓巡遊と合わせ、切符やホテルの手配、現地ガイドなど、細かな手続きの心配をせずに安全に旅を楽しめるという観光旅行の大衆化を実現する最初の例となった。またこの企画は、社名を上げ、本紙に関連記事を提供する「メディア・イベント」のはしりでもあった。¹¹ この旅行には記者が数名同伴し、旅行中、その直後は杉村楚人冠の『半球周遊』¹²などさまざまな記事が同時に掲載された。

その翌年(1909年)、今度はトーマス・クック社が主導して世界一周会を企画し、朝日新聞にも広告が載せられた。参加者は五人にとどまるが、当時東京朝日の社会部長だった渋川玄耳が帯同し現地から記事を送ることとなった。渋川玄耳は1907年に東京勸業博覧会を田舎紳士・藪野棕十の視点から滑稽に描いた『東京見物』を書き、『東京朝日』で人気を集めた。同年に出版された単行本版には夏目漱石が序文を寄せており、文体が『吾

⁸ 村山龍平(大阪朝日新聞社長)書簡 明治四十二年三月一日。十川信介編『二葉亭四迷全集別巻』(筑摩書房、1993年)、90-92ページ。

⁹ 参考として、1910年の銀行の初任給は40円であった。週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』(朝日新聞社、1988年)参照。

¹⁰ 朝日新聞の「世界一周会」については、有山輝雄『海外観光旅行の誕生』(吉川弘文館、2002年)に詳しい。

¹¹ 前出『海外観光旅行の誕生』参照。

¹² 杉村広太郎(楚人冠)『半球周遊』(有楽社、1909年)。

輩は猫である』に似ているため藪野椋十とは漱石のペンネームではないかと噂されたと記している。¹³ 今回の世界一周の報告記事もこの「藪野椋十もの」を踏襲したもので、「世界見物」として『東京朝日』に連載され、のちに単行本にまとめられた。この書物は現在ではほとんど忘れ去られているが、『東京・上方見物』と併せた一冊本『日本見物・世界見物』は、1915年に誠文堂から出版されると二年足らずで六万部を売り、ベストセラーになった。¹⁴ また、世界旅行の翌年には「藪野椋十」の銅像が制作されたことから当時の人気伺える。¹⁵

『世界見物』の文体—ガイドブック性・饒舌・現前性

渋川玄耳らは三月二十日に出発、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ドイツ、ロシアを通過し、七月六日頃に帰国している。『世界見物』は、一行の出発から一か月余り後の四月二十九日から、「藪野椋十」署名で『東京朝日』に百回連載された。『世界見物』の原稿は船便で送られていたため、予定通り到着せず連載が途切れたこともあった。¹⁶ また、連載中の五月十五日に『東京朝日』はほぼ二面を使って二葉亭四迷の追悼記事を組んだが、『世界見物』も休載されずに別ページに掲載された。また同時に連載以外にも関連記事が掲載され、この世界一周旅行が、ニュースであり読み物であるというメディア・イベントであったということを裏付けている。玄耳の旅行中は現地到着などを伝える短い電信記事が紙面に載ることがあった。例えば、四月二十四日、まだ『世界見物』の連載は始まってはいないが、『東京朝日』は玄耳らがニューヨークに到着したことを伝えている。さらに渋川玄耳として書いたペテルブルクでの二葉亭旧居の訪問記『露国に於ける二葉亭』も、同紙に七月九日から十二日まで掲載されている。

本編『世界見物』は、『東京見物』で好評だった藪野椋十のキャラクターを生かしながら、日本人の旅行者としての体験や日本人に興味のある話題について語る内容になっている。「椋十」という名は田舎者の喩えに使われる「椋鳥」にも通じ、その庶民的な視点は、観光旅行のはしりである「世界一周会」の方向性と一致していた。

では、文体はどうであろうか。まず書き出しをみると、本文の前に「路銀雑用—外国語—唾嚙—馬医—薬品—短刀—実印」と、本文で展開される話題を前もって提示している。渋川玄耳は、朝日新聞の社会面の改革に努め、特に記事に小見出しをつけるなど「読みやすさ」の向上に貢献し

¹³ 渋川玄耳『東京見物』（金尾文淵堂、1907年）

¹⁴ 渋川玄耳『藪野椋十 日本見物・世界見物』（誠文堂書店、1915年）。売り上げについては小川菊松『出版興亡五十年』（誠文堂新光社、1953年）による。

¹⁵ 森田一雄『野暮たるべきこと 評伝渋川玄耳』（梓書院、2006年）198ページ。

¹⁶ 七月十三日には、第六十五回を掲載する予定だったが、第六十五回から第六十八回が未着だったため、第六十九回を掲載した。二日後の七月十五日、記事が到着したため遑って第六十五回を掲載している。

たとされるが、この冒頭の小見出しもその経験を生かした新聞記事を読みやすくする工夫だといえる。¹⁷

それに続く本文の書き出しを引用する。

一世一代の大事と相成つた。

老後の思ひ出に世界見物をして御座れと村の衆が勧め、七十八十の老人が幅を利かす今の時節わしに俺などはまだ老後どころか老前の、此からが花聳盛りぢや、あながち目の上の瘤取りに逐ひやられるのもあるまい。世界見物と言へば山一つ彼方の和莊兵衛殿がズンとの昔に為られた以来誰も此近郷に例が無い、人の為ぬことあれば何でもして見たい性分の俺ぢや、其処に駆けこんで例の苔野奴が無暗と勧め立てるで、いよ／＼覚悟が極まつた。

さて支度ぢや、来年に為れば養老保険が取れる、頼母子講の満期が二口、苔野と二人前の路銀雑用はまづ事足りるといふものぢやが、困るのは言葉ぢや、異国の言葉というたら頓と心得がない、(略)

尤も西洋にも唾聾といふ不具物も居るに違ひない、強ち言葉が通ぜんでも命に別条は無い筈ぢや、医者も馬医なれば容態を聞かずに薬を盛るぢやらう、左程心配するにも及ぶまいが、念のため、風邪、疝癪、頭痛、喘息、肩癱、腰痛位の用心に葛根湯と腹一切の妙薬、角力膏と按摩膏、其れに熊の膽と気付が有つたら大概好からう、其の他短刀一口、論語一部、眼鏡、実印は忘れてならぬ大切な品ぢや、身のまはり万端は苔野と相談の上を取極めよう。¹⁸

玄耳は田舎者の棕十と同伴者の苔野が突然世界旅行に出ることになった事情を描いているが、外国語の心配、持ち物などの旅行者の実際的な問題について、滑稽な描写と現実的な配慮を交えて語っている。その具体的なアドバイスは観光旅行のガイドブックに通じるものがある。実際、単行本版には、「欧米漫遊の秘伝」として、海外団体旅行における諸注意を書いた付録がある。この本が後にベストセラーになったことを考えると、海外に行ったことのない庶民に「海外旅行」という体験を紹介する役割を果たした書物といえる。

また、第四十八回のニューヨークに関する記事では、棕十とニューヨーク在住の「東先生」が *skyscraper* という語の日本語の訳語を考え「摩天楼」という語を当てる場面がある。これはおそらく「摩天楼」という語が日本語で初めて使われた例であり、この記事に描かれた欧米像が庶民に大きな影響を与えたことを示唆している。

しかし、上の引用部分にも現れている通り、風刺的文体は饒舌に過ぎて上滑りだったことは否めない。漱石もこれを読んだ連載初日に「玄耳朝日

¹⁷ 前出『野暮たるべきこと』127-129ページ。

¹⁸ 渋川玄耳『世界見物』（有楽社、1909年）、1-3ページ

に世界漫遊通信を載せ始む。文達者にしてブルコト多し。強いて才を舞はして田臭を放つ。彼は文に於て遂に悟る能はざるものなり」と日記に記している。¹⁹

ここで『露国に於ける二葉亭』にも触れておきたい。玄耳は旅行中に二葉亭死去の報を聞くと、ペテルブルクに向かって二葉亭の旧宅を訪問して取材しこの記事となった。この記事の文体を考える上で、玄耳が二葉亭の住んでいた下宿を訪ねる冒頭部分と、下宿の人々と別れる結末部分が特徴的である。

〔冒頭〕二葉亭が坐つたといふ椅子に坐つて、二葉亭が凭れたといふ机にもたれて、二葉亭に親しかつたといふ老婢と語る。

『非常に心の好い、此の世界に無かるべき情深いお方が、此処を去つて、病気の為にお隠れなさつたとは誠に残念で御座います』と清水君が取次いだ訳語は稍堅苦しいが、疑ひもなく聊かの偽りもない真心より出で、感に打たるゝ我が顔を彼は傷ましげに打まもる。五十余りでもあらう、衰へた白い顔の婆さん、神より外に頼むものもない様な寂しさである、名をオリガといふ。



〔結末〕別れるとき、姉妹は正しい調子の日本語で『左様なら』といふ、露都に往つたら二葉亭と話されるといふことを此度の旅行の樂の一として居た予は、彼が口うつしに教へた此の日本語をせめて二葉亭の遺音として聞き得たのを喜ぶ。²⁰

この記事は二葉亭の最期を伝える貴重な文献として二葉亭の伝記などにも多く引用されている。当時の読者にとっては、二葉亭が死去したわずか二か月後に、二葉亭のペテルブルクの旧居についての記事を読めるという速報性も魅力的だったであろう。しかし文体において特徴的なのは、二葉亭の座っていた椅子やロシア人の知人たちの話す日本語など、渋川玄耳が二葉亭四迷の生きていた現場にいるという「現前性」であろう。記者が「その時にそこにいた」こと、またその瞬間を自らの目で見たという事を全面に押し出すことにより、この記事は「証言」としての性格を帯びる。ただ、その現前性は、「モノ」や日本語の「言葉」という確かなものを提示し、読者にそこにあるものを写しているという錯覚を与えることにより、逆に別の何かを見えなくしているし、またその事実を隠蔽しているとは言えないだろうか。現に、玄耳の記事を読んでも二葉亭の生きていたロシアの社会の様子はなかなか見えてこないのである。

¹⁹ 夏目漱石の明治四十二年四月二十九日付日記。『漱石全集』（岩波書店、1966年）第13巻、378ページ。

²⁰ 前出『世界見物』、367, 382ページ。

『露都雑記』—「排日」問題と二葉亭のジャーナリズム

『世界見物』において、渋川玄耳はアメリカ各地の日本語新聞社を訪問したり、現地在住の日本人にインタビューしたりと、アメリカの日本人コミュニティについて繰り返し取り上げている。玄耳は、そのなかでも特に当時アメリカで社会問題になっていた排日運動に強い興味を示している。第二十回「排日」では、サンフランシスコで椋十が現地の子供と出会ったときに起こった出来事を次のように描写している。

帰り路に学校子供らしいのが十人許り行き違ひさまに、ジャツブ／＼、スケベイ／＼と帽子を振つて大に歓迎の意を表した。亜米利加に排日党があるなどといふのは大きな間違ぢやテ。始め何を言はれたか解らなんだが苔野の説明に依ると、ジャツブといふのは老大人といふ事ださうぢやから、俺に向つて叟千里を遠しとせずして来るといふ様な慰勞の辞に当るのぢや、又スケベイといふのは好男子好美丈夫といふ語といふ事であるから、是は多分若い苔野に対するお世辞であらう、流石に子供でも西洋人は外交的ぢやとほと／＼感じ入つた。²¹

ここで玄耳は、アメリカ人の子供たちが日本人観光客に差別的な言葉を投げかけたというシチュエーションを描いている。玄耳がアメリカ滞在中にこれに似たことを体験したのかはわからないが、玄耳は人種差別という深刻な問題を苔野の誤解（意図的かどうかにかかわらず）と椋十の饒舌な語りによってコミカルな場面として描いている。その結果、新聞の読み物としては面白いエピソードになっているが、現実のアメリカにおける排日運動の実態については、それがどこまで深刻な問題なのか、かえってわかりにくくなってしまっていると言わざるを得ない。

同じ外国人差別（xenophobia）をテーマに扱った『東京朝日』の新聞記事でも全く違うアプローチを取っているのが、二葉亭がロシア渡航後書いた記事で唯一『東京朝日』に掲載された『露都雑記』（『東京朝日新聞』1909年3月17日・18日、署名は「二葉亭」）である。この記事の冒頭で、二葉亭はダンチェンコが日本滞在中に子供たちに「異人馬鹿」と呼ばれ、そのあとの観光もすべて不快になってしまったというエピソードを紹介する。しかし二葉亭が問題にするのは、日本人が外国人を「差別」したのかどうかではなく、そのような事件が「ルースコエ、スローウオ」紙に掲載されたダンチェンコ氏の旅行記で取り上げられ、ロシアで広く報じられたという事実である。

さらに二葉亭は、日本の大学生がロシア人通信員を「異人馬鹿」と呼んだという、「ノーウオエ、ウレーミヤ」紙に掲載された別の記事を紹介している。この記事の内容について、二葉亭は「概して此の通信は珍聞に富んでゐる」と書いている。この記事に書かれている内容は確かに滑稽なの

²¹ 前出『世界見物』、74-75 ページ。

だが、二葉亭の説明を読むと、その「珍聞」という言葉の意味は、ロシア人から見ると理解しがたい日本の社会現象（天長節の「万歳」の声、大学生が「異人馬鹿」という言葉を使っている）、ロシア人通信員の誤解としか思えないこと（「戦勝の名誉を表彰する神社」に向かう人々の行列について行くと吉原に来てしまった）、またそのどちらでもありうる「珍聞」など、多様な意味を含んでいることがわかる。その意味では、『世界見物』の「スケベイ／＼」のエピソード同様、やはり実際の状況はどうだったのかは決定しにくい。しかし、二葉亭はそのあいまいさを意識しつつ説明しようとしている。さらに二葉亭が渋川玄耳と決定的に異なるのは、そのような記事がロシア国内で持つ影響について彼が意識し、考えている点である。

ノーウオエ、ウレーミヤの社中には常識に富む紳士も少くない、その堂々たるノーウオエ、ウレーミヤがかういふ通信員のかういふ通信を平気で掲載する真意は僕も知らんが、しかしかういふ通信が保守臭味の露国人に一般に歓迎せらるゝのは事実である、需用の在る所供給之に従ふ、僕はかういふ通信を需要する露国社会の現状こそ我國民の正に大に注意する所だと思ふ。²²

このような記事が作り出す偏狭で時代遅れの日本人のイメージが、ロシアの特に保守的な人々に歓迎されているのだと二葉亭は指摘する。玄耳の記事が異国で出会った「差別」をユーモラスに描きつつもかえって誤解を招きかねないのに対し、二葉亭の意図は、むしろそのような記事の不確かさ、またそのような記事が本国でもつ影響力に向けられているのである。

その上で更に、二葉亭は、自らがロシアで受けた差別の実情を記述することによって、ロシア人の記事の影響を中和しようとする。別の機会に「例の異人馬鹿の話」になり、似たようなことはペテルブルグでは起こらないと信じて疑わないダンチェンコに対し、二葉亭は自身のペテルブルクでの人種差別の体験を語る。

人の面をぢろ／＼見て「支那人が通る」は無礼に相違ないが、まづ悪口の部には入れない、が中には凶星日本人と見て取つて、ヤポーシカが通るといふ、ヤポーシカとは我国の露助と同格で、日本人の賤称だ、複数だとヤポーシキとなる、之をヤボンスキイと間違へて単に日本人の事だと思ふ人が露語を知らぬ人に多いやうだが、大間違ひで、ヤボンスキイとは日本のといふ形容詞で日本人の事でない、日本人の事は露語ではヤポーネツといふのだ。²³

²² 十川信介、安井亮平編『二葉亭四迷全集』第四卷（筑摩書房、1985年）108ページ。強調は原文。

²³ 前出『二葉亭四迷全集』第四卷、110ページ。

二葉亭の説明は、彼のロシア社会とロシア語の深い知識に裏付けられていることがわかる。その意味で彼の視点は「旅行者」の視点以上のものであることはあきらかである。

二葉亭の記事は、全体として日本やロシアにおける人種差別の実情の報告である以上に、ロシアにおける日本関連記事の報告であり、ロシアのメディアが日本事情について曲解して伝えていること、またそのことが相互理解を妨げていることを伝えている。『世界見物』が海外における人種差別について、風刺とはいえあまりに安易に扱っているのとは対照的に、二葉亭はむしろ『世界見物』のような記事こそが他国への偏見を助長することになっていると指摘し、暗に批判しているのである。

結論—朝日新聞の「投機」の意味

「ジャーナリスト」としての二葉亭四迷の仕事について考えると、二葉亭が配信した記事以上に彼の追悼記事のほうがページを埋めるという皮肉な結果になったのは事実である。しかし『露都雑記』は、もし二葉亭が特派員を続けていたら彼がなしていた仕事の可能性を感じさせる。新聞記者としての二葉亭は、新聞に「載る」記事の文体を身につけられなかったし、新聞というメディアの特性をよく理解していたともいえない。その意味で、彼は「文学嫌の文学者」であったが、彼のジャーナリストとしての資質は更に疑わしいといえるだろう。しかし、彼の知識、表現力、そして体験は、たとえば他国の「外国人差別」のイメージが新聞メディアでどのように報道されていたか、というような問題に深く切り込んでいた。追悼文集『二葉亭四迷』を読む限り、同時代の文学者たちが二葉亭のそのような異国「体験」の質を理解していたかどうかは見えにくい。『露都雑記』で二葉亭が実践しようとしたことには、異国「体験」をメディアに載せるひとつの可能性が秘められていたのではないだろうか。